

現代日本社会における 就活文化の受容・実践過程と困難性

——就職活動生たちの主体性をめぐって——

溝口 翔太

本稿では、現代の就職活動が若者たちにとってどのようなものとして経験されており、どのようにしてその過程を乗り越えているのかということ进行分析してきた。それによって見えてきたのは、現代の就職活動を若者たちは個人主義的な移行過程として経験し、それぞれの就活文化の受容・実践過程の中で、その意味づけが行われていたということであった。その意味付けのあり方自体は、学生生活やこれまでの進路決定過程のあり方によって、それぞれ異なるものであったが、「就職活動を続ける自己」を再生産し、それによって「自己の軸」を導出し、進み続けなければならない状況に若者たちは共通して置かれていた。

まず第一章では、若者研究とノンエリート研究の展開を整理し、大卒就職研究との対比の中で、本稿における分析視角を提示した。それは、ノンエリート研究において用いられてきた、若者たちの経験にこだわる中から現代社会を捉え直すという手法であり、本稿では、それを大卒就職の領域において応用してきた。

さらに第二章では、就活文化という概念を用いて、現代の就職活動についての分析を行った。そこでは、まず本稿における文化概念を、ポール・ウィリスの文化と再生産の理論を見ていくなかで整理した。その上で、現代の就職活動を取り巻く就活文化について就職ナビサイトや就職対策書を中心に、その構成部分について明らかにしてきた。ここでは、①身だしなみ・就活マナー、②自己分析・企業研究を含めた情報収集作業と面接時にそれらを上手く伝える技術・対策方法、③自己啓発・社会人としての心構え、という三層から構成されていることを明らかにし、現代の就職活動において要請される「主体性」のあり方として提示した。

そして、第三章では、実際に就職活動を行ってきた若者に対する聞き取り調査を通じて見

えてきたものを、いくつかの観点から整理し、第四章において、分析を行ってきた。それを通じて、明らかになったことを三点にわたって提示してきた。

第一に、就職活動生たちは、実際に就活文化を受容・実践していく過程の中で、それを過剰に内面化しない処世術を身に付けていた。それによって、就職活動生たちが、企業の採用活動にただ巻き込まれるだけの存在ではなく、その人なりの主体的な就活文化の受容・実践のなかで就職活動を進めているということが明らかになった。

第二に、就職活動生がそのようにして就活文化の受容・実践を主体的に進めていくこと自体が、現代の就職活動・就活文化の要請に主体的に答えていく過程であり、個人主義的な移行過程を再生産していくことに繋がっていた。それは、ノンエリート研究において示されていた、他者との共同を通じた移行のあり方とは、異なるものであり、就活文化の実践の中では、他者の存在は、選考を進む上で重要な資源である。また、就職活動生にとって、就活文化の受容・実践過程は、自己分析を通じて自身のこれまでの経験から強い「自己の軸」を導出することによって就職活動を乗り越えていく過程であった。そして、その過程を肯定的に経験してきた就職活動生は本調査では多く、就職活動における自己分析の重要性が認識されていた。また、結果としてそのような過程の中で就職活動を経験してきた就職活動生は、内定先に対する満足度も高く、その意味で、就活文化の受容・実践が再生産されていく方向へ繋がっていくことが考えられる。

そして第三に、そのような就活文化の受容・実践過程が結果として、「就職活動から降りることのできない自己」へと繋がり、就職活動自体に対する負担やストレス、現代の日本社会の大卒就職に対する問題意識や違和感が抑圧されることに繋がる。さらに、就活文化の受容・実践過程の中で導出されてきた自己の軸に基づいて、これからの職業生活での困難も乗り越えていくことが目標づけられていた。そのことは、就職活動を終えて、職業移行を果たしていくなかでも、常に自己に軸を強化していくことで、進み続けなければならないことが意識づけられていることを意味する。そのような個人が要請され、それに応じていく個人が形成され再生産されていくという文化的状況の中に、若者たちにとっての困難性があると考えられる。